

荒涼館にみられる『ジェントルマン』概念

19世紀『ジェントルマン』概念研究の手がかりとして

Remarks on the Concept of Gentleman
in the Bleak House

For a study of the concept of Gentleman in the Nineteenth Century England

山 田 岳 志
Takeshi YAMADA

The aim of this study is an attempt to make clear the development of the concept of the gentleman in relation to the social structure in nineteenth century England. Charles Dickens' Bleak House is examined here. Literature makes it possible to analyse contemporary society more realistically than by social science, because, it tends to show the time and society more vividly by its free imagination. From this point of view, the concept of gentleman in the nineteenth century England will be discussed in this paper, mainly concerning self-made man and gentleman in the Bleak House.

1. 荒涼館にみられる社会像 一序にかえて—

本稿の目的は19世紀イギリスにおけるジェントルマン概念の追究の試みとして、C. Dickensの荒涼館にみられるジェントルマン像の検討、さらにその明確さを期すための補助的な試みとしてセルフ・メイドマン像の検討をも合わせてテーマへアプローチを試みることである。ヴィクトリア朝中期のロマン主義は、文学を社会的再生の機能体として、つまり小説は時事的な側面の追究といった傾向を持つものとして当時の社会と係わりを持っていたと指摘されている。¹ まして、C. Dickensの荒涼館が社会小説であると言われるように、この作品における階級社会、社会制度それに人間の資質についての問題が19世紀社会の秩序に言及するものであることを思えば、まさしく時代の動向と完全に合致する作品であるようにおもわれる。さて、
愛知工業大学 教養部 (豊田市)

ヴィクトリア朝中期の社会において、1832年の選挙法改正、1846年の穀物法(corn laws)の廃止等はブルジョワ階級が社会的勢力を拡張していく手がかりを与えるものであったと言われている。² 又、イギリスの繁栄と富強を世界的に誇示する結果になった大博覧会(1851年)の成功は、ブルジョワ階級にとって栄光の年でもあった。確かにヴィクトリア朝中期の経済的繁栄は科学、産業、教育の進歩と不可分に発展したものであったと思われるが、こうした時代は同時にメイヒューやアクトン等の報告によって知らされる労働者階級の貧困や悲惨な状況は、社会的不平等の側面をも当時のイギリス社会が抱える問題として提起されてくるようになるのである。こうした動揺するヴィクトリア朝中期の社会にあって、特に工業化社会を背景としたブルジョワ階級の社会的成長はこれまでイギリス社会において、その思考・行動様式を支配してきた伝統的な社会的、文化的価値基準に対する見

直しが求められるようになってくるのである。では、こうした状況下のヴィクトリア朝中期の社会をC.Dickensは荒涼館においてどのように観ていただろうか。まず、この作品の序章はロンドンの霧に覆われた大法官裁判所である。この大法官裁判所ではいつ終結するともわからないJarndyce対Jarndyceの裁判の遅延が社会的テーマとなって展開されていくのであるが、この裁判の遅延こそは「先例と慣習の世界」⁴に原因があった。つまり、「大法官裁判所というものは、たといときおりの法の遅延を招き、少しは混乱をひき起すにしてもあらゆる物事に永遠の決着——をつけるために人間の知恵の極致がほかのさまざまなものといっしょに、考え出したものである」、⁵であれば大法官裁判所に対する批判は既存の社会秩序を乱すものであるという考え方が支配的であったと思われる。このように伝統的社会的価値基準そのものに原因があったように思われる裁判の遅延こそは、ヴィクトリア朝中期の社会そのものであったと言えよう。しかも荒涼館という小説の内容全体がヴィクトリア朝中期の社会状態を表現しているように思われる。つまり、荒涼館とはイギリス社会であり、そのイギリス社会という家が荒れ果てて「こわれた屋根から雨がもり、くさりかけたドアのところまで雑草が道をふさいでしまった。」⁶ような荒涼たる家になっていることを象徴していると思われる。ヴィクトリア朝中期の社会をこのようにみたC.Dickensであれば、当時の階級社会や社会制度に対してもするどく批判を展開していくのである。「廃れたとは申せ、わが国の行儀作法はいまだに上つ方のあいだに名残りをとどめております。イギリスは——悲しいかな、わが祖国よ！——まったく墮落いたしてしままい日ごとに墮落しつつあります。もうこの国の中に紳士はあまり残っていません。わたしどもは数少ないのでございます。わたしどもの跡継ぎと申せば、ただ織物職工どもの仲間がいるばかりでございます。」⁷このようなC.Dickensによるヴィクトリア朝中期の社会の描写はまさしくブルジョワ階級の社会的成長がそのまま伝統的社会的体制を脅かす状況になってきた状況を示唆するものであったと思われる。「それについても、これは今の時世がおちいつてる混乱、つ

まり境界線の抹殺、水門の開放、差別の根絶を示す一つの著しい例だが」⁸スマイルズの思想の担い手ともいえるヨークシャーの鉄工場主の政界への進出の気運こそは伝統的社会的諸機構が地割れを行って崩壊していく寸前の状況でもあったろう。C.Dickensが描くヴィクトリア朝中期の社会とは工業化社会を背景にして社会的成長をしてくるブルジョワ階級と伝統的社会的体制とが社会的、文化的価値基準をめぐる階級間の対立が深刻化していた時代であったと思われる。さて、今回はこのように荒涼館にみられるヴィクトリア朝中期の社会構造の中でのジェントルマン概念の追究の試みであるが、それは同時にイギリス資本主義の発展にともなって変容したと思われるジェントルマン概念の問題を設定するための大雑把な予備的試みでもある。

2. 荒涼館にみられるジェントルマン像

いわゆる伝統的ジェントルマンの資質というのが、トーマス・エリオットによって構築されその普遍的文化概念がイギリス社会を支配して以来、それはイギリス人にとって思考・行動様式を決定するためのステイタスシンボルでもあったと言えよう。しかしながら、産業革命期を経て社会的成長をするブルジョワ階級の社会的勢力の増大は、伝統的ジェントルマン階級の秩序の動揺ばかりか、それに伴って生じる新たなジェントルマン像の模索が展開されてくるのである。「名流人士のうちには教養、思慮、勇気、廉恥心、美貌、美徳の持主が少なからずいる。だが絶大な長所がいろいろあるにもかかわらず、名流人士にはどこか少しまちがったところがある。」⁹それは一体何であったか。それはGeorge IVにみられたような伊達男に代表されるような特質が伝統的支配階級に多くみられるようになったことを指摘しているように思われる。C.Dickensによれば、dandyismとは社会の批判者であり、社会への参加を拒否するような、いわばブルジョワ階級の価値体系であるレスペクタビリティの観念とは相入れないものであったと言われている。¹⁰このように荒涼館にみられる伝統的ジェントルマンに対する観方は、人文主義的教養としての価値は容認しながらも、さらに

荒涼館にみられる『ジェントルマン』概念

レスペクタビリティの観念をも合わせてもつようなジェントルマン像が期待されていたように思われる。「彼らは時代という時計の針を逆にまわし、数百年の歴史を抹殺することによって民衆をきわめて美しい、信仰にあつい存在たらしめようと願うのだ。——彼らは一切が永遠に停止していることを発見した。いかなるものに対してもよろこびもしなければ悲しみもしない。また思想によって心をかき乱されることもない。彼らにとっては——真剣になったり、進展する時代の影響をうけたりすることがないように注意しなければならぬのである。」¹¹ C. Dickensはチェスニ・ウォールドにおいてみられる上流階級の人物像を人間的、社会的な発展というものに対して全く無関心な集団として描いている。であれば経済的繁栄によって刻々変容していくヴィクトリア朝中期の社会にあって、支配階級の自覚も「時世がどういこうほうに進んでいるのかじっさい分かりません。」¹² というほど当時の社会に困惑していたチェスニ・ウォールドにおける上流階級はもはや統治者として不適格者とみなされていたように思われる。であるからC. Dickensはこのような社会体制の中核における彼らの無責任がトム・オール・アロンズ通りの悲惨な状況をつくりだす原因でもあったと指摘するのである。さて、C. Dickensが荒涼館において伝統的ジェントルマンに対する描写を試みている箇所が多数散在するのである。例えば、リチャード・カーstonは8年間パブリック・スクールの教育を受けた、性格的には優柔不断さが目立つ19才の若者である。「どんな物事をも、未決定の、不確かな混乱したものとして、あとへ引き延ばし、——手あたり次第のなり成きまかせに任せて(どういこう成り行きかも知らないのに)——中途半ばでやめてしまうあの習慣」¹³ を植えつけたのは大法官府にもその責任があるというのであるが、そのヴィクトリア朝中期の社会である大法官府を支えるパブリック・スクールの教育内容にも批判が注がれていくのである。人文主義的教養を身につけ、しかも「ラテン語の詩を勉強した人が」、「僕はなにになったほうがいいのか全然わかりません。」¹⁴ というように、C. Dickensはリチャード・カーstonを通して伝統的ジェントルマンの教育機



「望遠鏡の博愛」パンチ誌より

関であるパブリック・スクールの教育内容自体に疑問を投げかけているように思われる。牧師以外なら、例えば、「僕はボートをこぐのが好きなんです。弁護士の実習生たちはずいぶん舟遊びにゆきますね。すてきな職業です。」、外科医、「それこそ僕の望むところです。」、陸軍です。もちろん。まず僕がしなければならないのは将校に任官することです。——」¹⁵「僕は今日で軍人を辞職だ。——結局この職業もこれまでと同じことだったね。ついでに牧師にでもなればよかったと思うよ。そうすりゃインテリの職業は全部ひとわたりやったことになるからね。」¹⁶ まさに19世紀のイギリスにおいては伝統的ジェントルマンの職業として、リチャード・カーstonが体験したようなものが社会的地位を確立していたと言われている。¹⁷ しかし、リチャード・カーstonのこのような気まぐれな性格はJarndyce対Jarndyceの訴訟事件の結果を期待する側面があったにしても、すべてに勤勉に努力する習慣、つまり生活していくこと自体に積極的な関心を養ってこなかったことにその原因があったということであろう。ここにおいてC. Dickensのパブリック・スクールの教育内容批判は、伝統的ジェントルマンの教養にレスペクタビリティの観念をも期待していたことが伺えよう。さて、荒涼館におけるパブリック・スクールの出身者といえば、スキンポールもそうである。このフットボールを得意とする伝統的ジェントルマンは医者としてドイツの公爵家に待医と

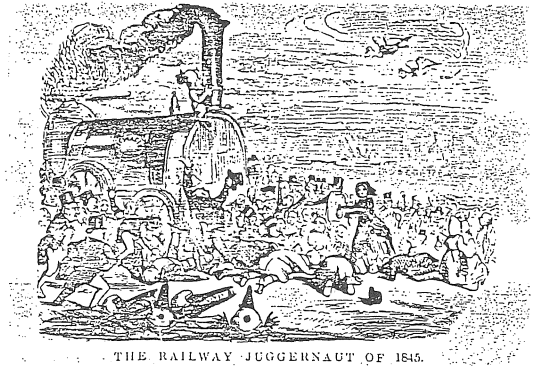
しての体験をもつ身であったが、この「スキンポールさんにはこの世の中でもっとも古い弱点が二つあったからです。つまり、一つは時間の観念がないこと、もう一つはお金の観念がないことでした。――大好きなのは新聞をよむこと、鉛筆で空想のスケッチを描くこと、自然、芸術」¹⁹ であり、ただ社会に対して求めるものと言えば、自分を生かしてもらいたいだけという気ままな、まさに〈資本主義の精神〉というものを微塵も持ち合わせていない芸術家のジェントルマンであった。であれば彼の哲学、「雄蜂の哲学」¹⁹ を展開するなかで勤勉な努力に対しては冷ややかな態度を示しながら、。マンチェスターやヨークシャーの強くたくましく生活する階級を批判するのである。さて、大雑把であるが荒涼館にみられる伝統的ジェントルマンに対してC.Dickensがどのような観方をしていたのかを検討してみた。そこにおいてC.Dickensは伝統的ジェントルマンが備えるべき資質としての人文主義的教養については評価を与えながらも、ブルジョワ階級が求めたような時代的精神としての人生における積極的姿勢、勤勉な努力に対する無関心(批判)な姿勢に対しては批判的であったように思われる。

3. 荒涼館にみられるセルフ・メイドマン像

ヴィクトリア朝中期の社会においてブルジョワ階級の社会的成長は伝統的ジェントル像の肯定的な側面も、ある意味ではネガティブな側面をもつようになってくる。というのもこのネガティブな側面の強調こそはセルフ・メイドマン像に連なるものであったろうと思われる。ここでは、C.Dickensがセルフ・メイドマン像をどのように描いているのかを検討してみる。「徒弟と職工をして参りました。長年のあいだ職工の賃金で暮らして参りましたので、ある程度から先は、独学をしなければなりません。妻は職工長の娘で質素に育てられました。ただ今お話ししたしました息子のほかに、娘が三人いますが、さいわい私たち夫婦の場合とちがいで、もっとずっと便宜をはかってやることができましたので、かなりのいや充分な教育を身につけてさせました。私たちの大きな苦勞と楽しみ

の一つは子供たちをどんな身分にもふさわしいようにすることです。」²⁰ この少々長い引用文こそは、小学校時代からシチュー鍋を使って蒸気機関をつくったり、カナリヤが勝手に水を飲めるような装置を考案して見せたり、²¹ 大きくなっても動力職機の模型をつくったりして、将来を不安がられて北の鉄工業地方へ送り出され、そこで成長し、世俗的成功をした鉄工場長がランスウェルであった。彼こそはイギリス資本主義の精神の表現者であり、まさにスマイルズの思想の担い手といえる者であつたろう。しかも、今やブルジョワ階級の仲間入りを果たしたエネルギッシュなランスウェルのチェスニー・ウォールド社の訪問はヴィクトリア朝中期社会の状態を如実に物語るようなことであつたろう。ランスウェルのチェスニー・ウォールドの訪問の目的は、今や徒弟奉公時代も終わり、独立していこうとする息子が、デイドロック公野夫人に仕える若い娘に惚れたため、その若い娘にとって将来のため女中奉公を止めさせ、ブルジョワ階級の人物の妻としてその義務を果たせるようにするため、然るべき教育を自らの手に委ねてもらうためであつた。こうした目的のためのチェスニー・ウォールドの訪問は、ブルジョワ階級と伝統的社会体制との義務観、支配階級観、教育観、統治観、等の相違を明示するような結果になった。レスタ公は伝統的ジェントルマン社会における義務を果たす以外にその行動力はさしてないと思われるが、ランスウェルは活動的で、飾り気や堅苦しさなど少しもなく、イギリスの経済的発展を支えるかのようにイギリス(北部の鉄の国)を忙しくとびまわっているエネルギッシュなセルフ・メイドマンである。そしてこのセルフ・メイドマンは彼の息子に対しても「私が自分で自分の道を切り開いて参りましたと同じように、息子も自分で自分の道を切り開いていく」²² ことを期待するのである。であれば、その息子の妻となるべき人物の教育は既存の社会秩序に依存して成り立っているような村の学校では不十分であつた。この鉄工場長によるブルジョワ階級の価値基準にみる教育観は、教育によって社会的上昇を可能にしていく世界を暗示するものであつたろう。であれば、教育による階級間の境界線の抹殺

は、伝統的な社会機構が崩壊していくことをも示唆するものであったろう。C.Dickensが荒涼館で描写するランスウェルこそ、ヴィクトリア朝中期の社会の改革者として期待する、それは崩壊寸前のチェスニー・ウォールドの世界とは対照的に、強く、たくましい職人でにぎわうヨークシャーに生きるセルフ・メイドマン像であったと思われる。さて、荒涼館にみられるセルフ・メイドマン像として、外科医のウッドコートが描かれている。彼は「医学のすべての活動に強い関心を身につけて、—— さんざん働いてもほんのわずかなお金しか手に入らず、長い年月をかなりの苦勞と失望をかさねても医学の中になにか報いになるものを見つけよう」²³ とする進出の気性と、船医となってシナヤインドへ出かけた時、遭難にあったときの外科医以上の行動的で、献身的な活躍ぶりが、彼を世俗的成功者にしたのである。「これから半年かそこいらの話だが、ヨークシャー州のある場所の貧民救護医師の任命が行われるはずなんだ。そこは産業もさかんだし、景色もいいし、小川もあれば町もある。都会もあれば田舎もある。工場もあれば荒野もあるといった場所で、ああいう人にはもってこいの口だと思よ。」²⁴ つまり、ウッドコートは外科医としては勿論、彼の仕事に対する希望や抱負、そして奉仕的精神といった資質が高く評価されて職人でにぎわうヨークシャーの世界でたくましく生きるセルフ・メイドマン像として描かれているように思われる。さて、荒涼館にみられるセルフ・メイドマン像を鉄工場長のラウンスウェルと外科医のウッドコートを例にC.Dickensがセルフ・メイドマン像に求めるものが何であったかを検討した。この両者にみられる特徴はスマイルズの思想の担い手であったことだと思われる。ししながら、C.Dickensはそれ以上にこの両者に対して他人に対しての犠牲的な精神、行動力といったものを求めていたように思われる。こうした資質こそヴィクトリア朝中期の社会における伝統的ジェントルマンに欠けるものであったと思われる。であれば、荒涼館においてC.Dickensがセルフ・メイドマン像に社会の推進者としての期待をよせたのもイギリスの社会秩序に対する告発でもあったろう。



「1845年の鉄道ジャガノート」パンチ詩より

暫定的結語

19世紀のジェントルマン概念をC.Dickensの荒涼館を中心に、そこにみられる社会観との係わりを通して大雑把な追究を試みてきた。さて、C.Dickensによる伝統的ジェントルマン像は人文主義的教養を身につけたジェントルマンとしてその文化的価値は容認しながらも、それだけではヴィクトリア朝中期の社会という条件に対応できなくなってきていることを指摘したように思われる。C.Dickensによるセルフ・メイドマン像への期待も当時の社会へ積極的に働きかけていく人物像として描かれていたように思われる。このことはまた、C.Dickensが既成価値体系の中では認められない伝統的社会体制の価値体系に批判的な考えを持っていたからではなかろうか。

引用・参考文献

1. 西条隆男 「ディケンズと読者」 イギリス史研究 No.28. P.10. 1979.
2. 青木 康 『『ヴィクトリア時代の政治と社会』をめぐって』 イギリス史研究 No.30. P.11~12. 1980.
3. 村岡健次 「ヴィクトリア時代の政治と社会」 P.19. ミネルヴァ書房 京都市 1980.
4. 青木雄造、小池 滋 訳 「ディケンズ——荒涼館」 P.11. 筑摩書房 東京都昭和56年.

5. Ibid. P.12.
6. Ibid. P.67.
7. Ibid. P.131.
8. Ibid. P.261.
9. Ibid. P.107.
10. 川本静子 「Charles Dickesns」 英語
青年. Vol.CXIV.—No.5 P.302.
1971.
11. 前掲書 P.108.
12. 前掲書 P.108.
13. 前掲書 P.85.
14. 前掲書 P.113.
15. 前掲書 P.216.
16. 前掲書 P.406.
17. 前掲書 P.126.
18. 前掲書 P.78.
19. 前掲書 P.89.
20. 前掲書 P.263.
21. 村松昌家 「ディケンズの小説とその時
代」 P.154. 研究社出版
東京都 1989.
22. 前掲書 P.262.
23. 前掲書 P.116.
24. 前掲書 P.529.

.....

村松昌家 訳 『ディケンズの世界』 英宝
社 東京都 1978

小松原茂雄 『ディケンズの世界』 三笠
書房 東京都 1986